はしがき

２００１年（平成１３年）４月に発足した神田外語大学大学院（言語科学研究科）言語科学研究センター（Center for Language Sciences: CLS）の紀要『Scientific Approaches to Language』第１号を公刊できることを幸いに存じます。

当研究センター（CLS）は、本学大学院が平成８年度から平成１２年度までの計５年間文部省の中核的研究拠点(COE)形成基礎研究費の助成を受けて行った、人文科学と自然科学を統合した国際的な研究拠点を築くことを目的としたプロジェクト『先端的言語理論の構築とその多角的な実証』(研究リーダー：井上和子）の研究成果と研究体制を基に設立されました。先のCOEプロジェクトでは、人文科学的な見地からの「言語」に関する研究を核とし、理論構築とその実証という形で人文科学と自然科学を対等に統合した研究の促進を目指して、独自の基盤を形成しました。自然科学に補助的な役割を人文科学に求める一般的な風潮の中で、両分野の密接な共同研究のお蔭で、言語理論研究のみならず、言語習得研究、脳科学、言語の機械処理などそれぞれの分野で独創的な研究が進み、成果を上げました。

新しく発足した当研究センターは、これらの成果を踏まえ、COEプロジェクトにおいて中核を担った言語の記述的、理論的、実証的研究に加え、本学および本学大学院が外国語大学としてその教育と研究の中心に掲げる言語教育と学習についても、その理論を深化させる研究を含め、人文科学と自然科学、社会科学の諸分野の枠を越えて、「言語」を横断的に研究することを目指しています。すなわち、CLSは、幅広い視野と確固たる視点を持った言語研究の拠点として、言語理論の観点から言語の本質に迫る研究、全ての言語研究の基盤となる記述・実態調査研究、ヒトの認知活動を視野に入れた言語理論の実証研究、言語学習の現実に迫る言語学習理論の構築、などに従事し、理論的研究だけでなく、理論に裏付けられた応用研究を追求することで、幅広い対象に対する第二言語習得に関して実質的な提言を行うなど、社会的な貢献も期待できると信じています。

CLS紀要第１号である本号は、８編の論文を収録していますが、言語理論に関わる研究としては３編が含まれ、*長谷川*の論文は日本語の主要部内在型関係節の統語分析を通して意味役割認定のメカニズムを整備し、*井上*の論文では日本語の格と後置詞の交替現象を扱い、格の表出における概念意味構造と統語構造の関わりを考察しています。*岩本*の論文では、日本語の空間表現のアスペクトを概念意味論の観点から分析しました。実証研究としては、COEプロジェクトからの継続で日本語の疑問詞疑問文の解析実験結果を分析した*Miyamoto and Takahashi*の論文があり、記述・実態調査研究では、*木川*の論文が、日本語の東西方言の境界として注目すべき地域の特色を方言分布の観点から考察しています。第２言語学習理論の観点からは、母語との比較で、*Horiba*が読解と記憶の関係を、*Watanabe*が書く作業（writing）とそのインプットとなる文章（source materials）の関係を考察しました。また、*斉藤*の論文は、言語文化学をヒトの言語能力と運用システムから位置づけ、それを「もう一つの言語学」として確立させる議論を展開しています。

CLSの初年度となった２００１年度は、萌芽的な研究成果やこれまでの研究成果の充実といった研究が含まれていますが、今後着々と創造的な発展を遂げることができることと期待しています。

本号をまとめるにあたっては、表紙のデザインから論文の書式の作成、執筆者との連絡、論文取りまとめを一手に引き受けて下さった本学大学院博士後期課程満期退学の藤巻一真さんと、印刷所との連絡を含め細かな事務的な作業を短期間で効率よくこなして下さったCLS事務担当の椎名千香子さんの献身的な作業がなければとても刊行までには至りませんでした。感謝します。

２００２年 ３月

言語科学研究センター・顧問
井上 和子

言語科学研究センター・センター長
長谷川 信子